

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第128回

【書評】柳沢史明『〈ニグロ芸術〉の思想文化史：フランス美術界からネグリチュードへ』

黒人アフリカ世界の立体造形とその 言説的觀念史

ニグロ表象におけるトランス・アトラン ティックな「支配と抵抗のポリティクス」

稲賀 繁美

(いなが しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学教授，放送大学客員教授)

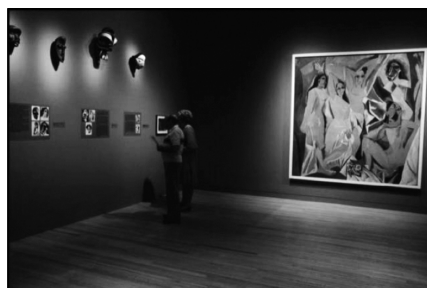
『フランス絵画（1905-1914）と「ニグロ芸術」』■01の著者，ジャン・ロードに評者はパリで師事した。また『20世紀美術におけるプリミティヴィズム』■02に「アフリカから」を執筆したジャン＝ルイ・ボードラとはロードの没（1984）後，いささかの交流をもった。さらに「文明間相互の知」を掲げるTransculturaという小さな学術団体の発足（1987）にも参与したが，そこにはレオポール・セダール・サンゴールが名誉会長として言葉を寄せている。欧州側の非欧州認識は学知として認証されるが，非欧州側が欧州に注いだ視線は久しく真摯に扱われることがなかった，と元セネガル大統領は，晩年に至ってなお，そう痛切に述べていた。1980年代は，まだそんな時代だった。一方は本書冒頭に現れる研究者たち，他方は本書副題に扱われた「黒人性」概念の提唱者。ピカソやブラック■03がアフリカ藝術に依拠した「未開主義」から始まり，

「黒アフリカ」の「覚醒」，そして脱植民地化に至る展開。それなしにフランス諸国の近代と北米の思想文化史は語り得ない……。

博士論文に立脚する本書は，この重要だが疎かにされてきた局面に照明を与える。ロードの博士論文（本稿冒頭に指摘した著書；1968）から半世紀の時代の推移も，そこにはくっきりと刻印されている。すでに『図書新聞』『読書アンケート』（2018年7月21日付，3360号）でも，天野知香，澤田直など複数の論者が，的確な指摘とともに本書に高い評価を下しているのので，内容要約は割愛しよう。フランス「本国」でも「通用」する新機軸としては，セネガル勤務のあとパリ植民地学校長を務めた植民地行政官ジョルジュ・アルディの業績発掘。1929年パリで開催されたカリファラ・シディベ■04-05の展覧会。さらに大西洋を横断して，ハーレム・ルネサンスを代表するA.L.ロック。これら



■01 ジャン・ロード 『フランス絵画と「ニグロ」
藝術』 1968



■02 「20世紀美術におけるプリミティヴィズム」
展 会場風景 MoMA (ニューヨーク) 1984



■03 ジョルジュ・ブラックのアトリエ 1912



■05 カリファラ・シディベ展ポスター ヴィーン
1930



■04 カリファラ・シディベ 《ニジェール河のほとりにて》C1929
(所在地不明)

三章が主軸をなし、大西洋の往還の裡に時代と思潮を浮き彫りにする。

ルーヴル美術館学藝員のジョルジュ・サルやアフリカ美術商として著名なポール・ギヨームが、植民地行政による現地への関与に否定的だったのに対し、アルディはデッサン教育を通じて現地の職工にあらたな造形が開拓されると論じる一方、1931年の植民地博覧会での会議において、サハラ以南の地で「原住民藝術の覚醒」を促す可能性も否定しない。「西洋の模倣」ではない「美学的遺産」の「進歩」というその行政官的視点は、仏領インドシナの工藝学校のみならず、インドの工藝復興に携わったG. バードウッド卿やボストンに亡命した中世主義者A.K. クーマラスワミ、日本支配下で朝鮮の民藝を発見した柳宗悦の姿勢と比較するに値する。

そのアルディの主張する教育効果を立証する具体例が、「スーダン出身」のカリファラ・シディベの絵画表現。Art nègre (ニグロ藝術) という表現の産みの親、アンドレ・ワルノーがその興行主と推定され、ル・コルビュジエやミシェル・レ

リスも言及した「画家」だが、欧州での「成功」の代価か、放蕩三昧の末、30歳で夭折する。

相前後する時期にベルギー領コンゴで「発見」されたアルベール・ルバキ■06の場合、ベルギーの行政官で詩人のジョルジュ・ティリーが「素朴」な画題や空間表現を仔細に指示していた証拠も残っている。かくして「生粋」の「ニグロ」性が、植民地政策の恩恵として「発現」する。「捏造」こそが「真実」。欧州からの視線なくして発現する「真正」なる「アフリカ」性など、元よりないものねだりでしかなかった。「外からの影響の欠如」という虚構なくして、アフリカは「表象」され得ない。

ここからアフリカ側の「同意と拒絶」が展開されることとなる。「文化遺産」として何を「引き受け、それを依代に」いかに「自らが置かれた同時代的状況を打破」するのか。この「思潮や運動」の「太平洋横断」と「ニグロ藝術」の北米での「流用」へと話題は進む。美術蒐集で著名なアルバート・バーンズ「博士」は、「アメリカ文明の将来の発展に貢献



■06 アルベール・ルバキ
《無題》 1929

■07「アフリカ黒人美術」展展示準備中の作品群 MoMA 1935



する黒人文化」を推奨する見解を披歴した。その傍らでロックは、祖先と現今の黒人ともに「人種的靱帯」のあることを認める一方、新大陸の奴隷制によって失われた造形的才能を再生させる契機を「新しいニグロ芸術」の標語の裡に志向する。

1935年には、開館ほどないニューヨークのMoMAでアフリカ彫刻展が開かれる■07が、その展示責任者J.スウィーニーはアフリカ彫刻の「形態の表現力」と欧州美術の新傾向とともに「偶然の一致」を見出した——とロックは解釈する。これに対して、ロックと同じく黒人知識人のJ.ポーターは、肌の色の強調は人種差別主義者の主張に安易に染まるものと、ロックを批判し、むしろアメリカ文化への貢献ゆえに、黒人霊歌を含む芸術表現を擁護する。

こうしたハーレム・ルネサンスの論争動向が、カリブ海域の文化運動の潮流と合流してフランスに還流し、「汎アフリカ」美学へと刷新されてゆく。先述のロックがアフリカ音楽の「韻律」や「リズム」に示した関心が、A.ゴピノーに影響されたエリー・フォールや、ドイツ語圏の民族藝術学者、エルンスト・グロッセらの議論に重ねられ、ル・コルビュジエの兄

で音楽家のアルベール・ジャンヌレの評論「黒人とジャズ」と呼応する。著者はこうした議論を、英語圏モダニズムの「造形的フォルム」、さらにはブルムスベリー派の批評家クライヴ・ベルのsignificant formへと接ぎ木する。

ここに1932年から翌年にかけて、マルティニーク出身のポレットとジャーヌのナルダル姉妹の刊行した『黒人世界評論』が絡む。同郷の親戚筋に当たるルイ＝トマシ・アシルは「ニグロ」の「ダンス」とアフリカの彫刻的造形を類比させる。その傍らに詩人エメ・セゼールがnegritudeを提唱する。

こうした経緯のうえに、片やサンゴールの「ニグロの魂」が登場し（サンゴールの「リズム」論にL.クラークスの所論との共鳴を推定するのは著者の慧眼）、片やその「生命の呼吸」に共鳴しつつも「ネグリチュード」の本質主義に根底的な異議と唱えるフランツ・ファノンの「闘争」が、鋭い論旨を突きつけ、束の間の光芒を見せる。「真正の黒人性」なる観念の捏造ぶりに、ファノンは植民地統治下の抑圧が内攻した残滓、硬直した思考の「鉍物化」「ミイラ化」を嗅ぎ付ける……。

思想史上の振幅を縦横かつtransat-



■08 アラン・レネ+クリス・マルケル
《彫像もまた死ぬ》(1953) より

lanticに踏破して見ただけでも、すでに本書の力量は明らかだろう。だがここまで来れば、次に論じて欲しい話題がさらに続々と到来する。筆者は禁欲的にも観念史・概念史の言説分析に自己限定している。だが図版への説明を見れば、造形への鋭い感覚も随所に片鱗を見せ、豊富な引用文献注からは、重要な歴史的事件がなお多く割愛されている様も歴然とする。著者が別途扱ったカール・アインシュタイン（冒頭で触れたロードはウラディーミル・マルコフとともに、講義で頻繁に言及した）、アルディの盟友であったオピエ神父の宣教活動、セネガル出身でサンゴールに感化を与えた文筆家P. バイ＝サルツマン、ジブチ＝ダカール遠征とミシェル・レリス、マルセル・グリオールらの動向……。

これら個々の事例については日本でも先行研究には事欠かない。だが一般の読者には、本書の探索の周囲に広がる鳥瞰の見取り図があらまほしい。植民地末期のアフリカ美術表象が孕んでいた、熾烈なまでの政治的軋轢、暴力的抑圧、色濃い人種的偏見……本書前半の学説史的整理では、それら苛酷な論争が「サイド後」的地平から整序され、「未開主義」批判の急先鋒、J. クリフォードに負う理

論枠からは、なぜか1980年代末の現場に溢れていた一触即発の緊張感が、見事に中和されている。慎重に周廻する筆運びは、論点逸脱を厭って、時に核心直前で転進する。

ほんの一例に過ぎないが、シャルル・ラトンの助言のもと、アラン・レネとクリス・マルケルの制作したフィルム『彫像もまた死ぬ』（1954）■8。完成後11年間発禁処分を喰ったこの禁断の映像・音声ひとつ取っても、緊迫した時代の臨場感に圧倒される。わずかでも体験した者ならば到底忘れることはできない酷薄、戦慄を禁じえない肌触り。それを十分に喚起するだけの筆力が、著者には備わっているはずだ。本書で提供された、仔細にわたる語彙詮索の観念史の舞台の上に、次なる機会には、漆黒の彫像たちが跳梁し、欧米から侵入した探検者たちを「呪物」の群が襲う現場の活写を期待したい。音声・映像さらには臭覚、味覚、触覚を駆使した記述の妙技が、アフリカの韻律を喚起するのだから。

* 柳沢史明『〈ニグロ芸術〉の思想文化史：フランス美術界からネグリチュードへ』、水声社、2018年3月30日刊行、税別5000円